現代俳句岡山

第56号

令和6年9月発行

令和六年度 定期総会

令和六年四月十七日（水）岡山県ゆうあいセンターに於いて二十三名の出席者、三十二名の委任状のもと開催された。

永年副会長、顧問としてご尽力頂いた永禮宣子顧問が二月二十七日に逝去、総会に先立ち謹んで哀悼の意を表し、全員で黙祷をささげた。

木村ゆきこ会長のあいさつ「コロナ以降俳句の環境も大きく変化しているなかですが、昨年度は多くの新会員も参加し活況が見られます。今年度におきましても皆様で参加し楽しめる活動が行えるようにしたい。」と述べられる。

総会に先立ち令和五年度の新会員十四名の紹介、当日参加者の挨拶があり歓迎の拍手が送られた。

秋岡宣子副会長を議長に選出し、次の議題について審議された。

一、令和五年度事業報告・決算及び監査報告

事務局長より活動内容の報告

令和五年度会計報告

薄和子会計担当より収支決算の報告及び、黒瀬紘子会計監査担当より監査報告

二、令和六年度事業計画

事務局長より計画案の提示

①定期総会と持寄り句会

四月十七日　岡山県ゆうあいセンター

②第二十九回岡山県現代俳句大会

十月十三日　岡山県ゆうあいセンター

③第二十五回吟行会

十一月四日　岡山後楽園　鶴鳴館本館

④会報発行

・五十六号　令和六年九月

・五十七号　令和七年三月

編集担当より発行予定と原稿協力の要請

⑤役員会　随時

三、令和六年度会計予算

薄会計担当より予算案の提示

四、会則変更

組織名称の明確化、一般社団法人現代俳句協会非会員の年会費の改定

以上の議題について議事は円滑に進行、すべての承認を得た。

連絡事項として、第六十一回現代俳句全国大会への投句と参加の要請、新会員の推薦の依頼のあと、佐野副会長による挨拶により全日程を終了した。

◇総会終了後会員による持寄り句会が開催された。

（前田　宏記）

第42回 中国地区現代俳句大会

とき：令和六年六月九日（日）
ところ：島根県現代俳句協会担当

ごあいさつ

会長　川崎益太郎

総会の開催にあたりごあいさつ申し上げます。

コロナ、高齢化の中、島根県のご意見を踏まえ、今年も対面しての総会、大会は中止とさせていただきました。四年連続の中止となりました。各県のご意見をお聞きしても、この紙上総会、俳句大会が相当という意見が多く、今後はこのやり方が原則となりそうです。しかし、この大会そのものは続けてほしいという意見が強いので、これまでどおり輪番制の紙上大会として続けたいと思っておりますので引き続きよろしくお願い致します。

いつの日か、集合しての大会が出来ることを期待して私のあいさつを終りたいと思います。

〈議案〉

一、年会費は当面現行どおり、一人四〇〇円を維持する。

二、令和六年度の助成金等は、五万円とする。

三、次年度以降の助成金は、会費収入、担当県の大会開催方法（泊・日帰り・講師の招へいの有無）等をみて今後検討する。

定期大会議事録より

入賞作品（岡山県関係のみ）

中国地区現代俳句大会賞

知らんぷりするにも力冬木の芽　髙村　蔦青

中国地区連絡協議会賞

不舎能孚同じ命日ふきのとう　豊田　級衣

優秀賞

駐在所の指名手配と雛かざり　花房　典子

秀逸賞

峡に生き古希は若手よ耕せり　難波　正夫

もう夢は語ってくれぬチューリップ　小西　邦子

陽炎の芯となりたるロダン像　木村ゆきこ

各県協会会長特選賞

岡山県現代俳句協会会長賞　木村ゆきこ選

不舎能孚同じ命日ふきのとう　豊田　級衣

広島県現代俳句協会会長賞　川崎益太郎選

不舎能孚同じ命日ふきのとう　豊田　級衣

令和６年度予算（令和６年４月１日～令和７年３月31日）

摘　　要	収　入	支　出
前期繰越金	1,637	
会　　費 広島県　50×400＝20,000 鳥取県　19×400＝ 7,600 山口県　65×400＝26,000 岡山県　73×400＝29,200 島根県　12×400＝ 4,800	87,600	
助成金 第43回中国地区大会・広島県		50,000 （予定）
事務費		10,000
次年度繰越金		29,237
合　計	89,237	89,237

令和５年度決算報告（令和５年４月１日～令和６年３月31日）

摘　　要	収　入	支　出
前期繰越金	4,037	
会　　費 広島県　50×400＝20,000 鳥取県　19×400＝ 7,600 山口県　65×400＝26,000 岡山県　73×400＝29,200 島根県　12×400＝ 4,800	87,600	
寄付金	（開催県が受領）	
助成金 第42回中国地区大会・島根県		80,000
事務費		10,000
次年度繰越金		1,637
合　計	91,637	91,637

令和６年３月31日
会計担当　川崎千鶴子　㊞

令和５年度監査報告

監査の結果、上記決算報告のとおり適正に処理されていましたので、報告いたします。

令和６年４月20日
監　　査　塚本みや子　㊞
監　　査　藤本　陽子　㊞

永禮宣子氏を悼んで

黒瀬　琢葉

略歴

１９４０年津山市に生まれる
１９５８年～２０００年　津山市役所勤務
１９９２年句誌「綱」（白石不舎創刊）入会
１９９３年「西東三鬼賞」の発足に尽力
２００６年句集「悪童ら」上梓
２００９年～小学校の俳句教室開催に尽力
２００９年現代俳句協会へ入会
２０１２年～２０２０年「綱」俳句会代表

主な審査員歴

岡山県文学選奨審査員
津山朝日新聞俳壇選者
美作市民文学選奨審査員

主な受賞歴

西東三鬼賞　秀逸、入選
中国地区現代俳句大会
岡山県現代俳句大会
ヒロシマ平和祈念俳句大会

西東三鬼賞　秀逸作品

悪童ら入道雲を連れ歩く（第十回）
芒ばかり増やして地球淋しがる（第二三回）
三鬼忌の赤い猫なら連れて行く（第二九回）

その他

５という字キャチャーみたい入学す
少年に指から戻る春の川
ＮＯといふて上顎離る舌涼し
枇杷の実や君はゲゲゲのパパだろう
打ち水や四十六億年の地球
蛍飛ぶ闇の裏糸表糸
泉湧く地球のくすぐったいところ
ハロウインのお化け負はれて眠りけり
ごく稀に鬼の横切る大枯野
残心を振り切る高さ鳥渡る
初日記言葉を捨てるところから
日本史の今何ページ寒椿
空蝉やアメリカに生れアメリカ兵
七十年叫んで蝉になった父
川の名や木の名草の名広島忌

ここにあげた能孚さんの句のどの句を見ても、他人にはとても真似できない、ユニークで、大胆かつ繊細、時に子供っぽい句が並ぶが、物の本質を捉えている。そしてアニミズムへの憧れ。性格も句とどこか似て、ちょっと躊躇するようなことでも、スパッと発言してついには周囲を納得させた。反面、会員の一人一人に細やかに声をかけたり、達筆すぎて読めない字で葉書をくれたりした。

去年の九月末に、短歌誌「樹林」の代表の野上洋子さんのインタビューを受け、その時の二人の対談がとてもリズミカルで意気投合していたので、許可を得て「綱１１６号」に転載したのが、今となっては彼女の遺言となってしまった。

令和六年二月二十七日
師白石不舎と同じ命日に没（合掌）

赤い猫連れてあの世へ春疾風　　琢葉

総会持寄句会

心臓の近きところで抱く仔猫　三宅　章文
幸せ行きの汽車が着くまで石鹸玉　橋本　幹夫
眠る子の髪やわらかき新樹光　古川　麦子
蒜山を背に抜き立ての春大根　國富　節子
山笑ふ宅配便はかりんとう　黒瀬　琢葉
亀の鳴く今のいま今待ちつづけ　片岡　陽子
桜東風剃刀の刃に残る泡　小西　瞬夏
春昼や花屋の奥の小暗がり　花房　典子
春雷や鳴釜神事いざ始む　岩田　志乃
八方の神を崇めて春耕す　國富　柿方
気まぐれの夫の言葉や柏餅　豊田　級衣
片栗やツンと横向く昼下り　倉見　雯匝
花は葉に世は混沌として風の中　右手　采遊
鳥の恋曲がりくねった石畳　薄　和子
春の昼手動のシュレッダーきしみをり　木村ゆきこ
歳老いてピアノと語る夜半の春　亀山　邦子
悪童らミンミンゼミを奪い合い　佐野　由魚
大空へ水平飛行初燕　仲村　宗侑
涙腺の緩みやすくて豆の花　鈴木　文子
春日傘もて七難を隠すべく　秋岡　宣子
割引のシールを剝がし万愚節　小西　邦子
「それはそれは遠いところを」能登薄暑　土屋　鋭喜
名刺屋に肩書消して春の宵　前田　宏
五分咲の宗堂桜悲話語る　万波　照世
杉皮を葺きて蝶くる地蔵堂　四宮　和美

令和六年度前期
新会員作品集

令和六年度前期の新会員として、推薦し、承認を得た。ここに作品を特集して紹介にかえる。

■ 片山千恵／小春の日

秋晴や園児の丸いひざこぞう
抱っこ紐の赤子そろりと小春の日
五段雛二軒長屋に御座します
秋早朝の火事頭上のホバリング
花時の空っぽ母家深ひさし

■ 嶋田美代子／万歩計

あめんぼう付けてみたきや万歩計
膝に乗すかろき吾子との昼寝かな
ひとり居の夫のちゃぶ台梅雨明ける
静寂のもどりし港都花火果つ
水打つや午後の銀座の静もれり

■ 松川郁子／夏

蝉時雨心の声に耳澄ます
白南風に抱かれさざ波走りけり
孟蘭盆会我を愛した人在りし
琉球の愛撫のやうな南風
夕さりの風に誘はれ二重虹

新会員候補者推薦のお願い

新会員候補者は、会員各位の個人推薦により選出されることになります。

会員のみなさまの周辺に、協会員に相応しい方がおられましたら、所定の「入会申込書」により、是非、ご推薦くださるようお願いいたします。

推薦いただいた方は、会長の承認を得て会員となっていただきます。

なお、「入会申込書」は随時受け付けますが、入会日は入会手続き終了後となります。

現代俳句協会

私の感銘句

秋岡　宣子選

一族につるんと生れ豆の花　中野　澄子

私見であるが、四人の子を産んだ経験から「つるんと」という身体感覚は納得する。勝手な解釈なのかも知れないが、一族の一員として迎えられる大きな幸せと、この軽やかな表現に好感を持った。

豆の花の生命力に命の繋がりを感じる。

伊勢海老の二日酔ひならこの寝相　難波　正範

くるりと背を曲げて寝入っている人を見て、句にしよう等と思いつくこと自体がユニーク。なかなか難しいと思うが、ご本人を伊勢海老にしてしまえばこんな楽しい句に。

何のてらいもなく肩の力を抜いて、読み手をくすっと笑わせてくれる。

初春やただ戦争を観てをりぬ　沼本　養卯

新年を迎えても終わる気配の無い戦争が世界のあちこちで続いている。報道を見聞きする度に居てもたってもいられない気持ちになる。見て、ではなく観て、という字に、傍観するしかない身のはがゆさがこもっている。

他人事ではないのに。もう二度と戦争の句など詠みたくもないのに。

私の感銘句

加藤　正枝選

急用で絵本飛び出すかたつむり　豊田　級衣

かたつむりに「どんな急用があったのでしょう？」

一瞬クスリとしましたが、絵本の中のかたつむりは絵本から飛び出せるわけはなく、万が一に飛び出せて、どんなに急いでも「かたつむりの歩み」なのです。「急がば回れ」「急いては事を仕損じる」などの諺が浮かび、「そんなに急がなくても。ゆっくり進み、自分が今居る場所で、良い明日をみつけましょう」って、言ってもらえているような、そんな思いになりました。絵本から飛び出すかたつむりを見たいです！

雪兎ならぶ大学食堂前　新田　啓

雪兎が並んでいる……それだけでもほっこりですのに、場所は幼稚園ではなく「大学」なのです。そして、食堂前なのです。雪兎が並ぶ大学食堂前に行ってみたい！って思いました。大学で授業を受け、食堂でお腹を満たし、雪兎を作って午後の授業に向かう……そんな優しさを持った学生さんの未来が楽しみです。

持続可能な国であろうか目刺焼く　土屋　鋭喜

テレビでも新聞でも「持続可能な云々」と言っています。言葉が空を舞っているようで未来が心配です。作者はお酒を呑みながら、テレビから発せられるこの言葉に、この国に、この地球に危惧しているのでしょう。目刺を焼きながらついつい言ってしまいますよね。でも、一人呑みは量が増えます。どうぞ、飲み過ぎには注意してください。

私の感銘句

豊田　級衣選

若かりし父母の写真や福寿草　繁森　明美

福寿草は幸せと永久の幸福という花言葉があります。アルバムにご両親の若い頃の写真を見つけたのです。ご両親が、福寿草を大切に育てた年月、家族の絆を感じます。

うららかや白髪ほめ合ふ同い年　中野　澄子

とても心あたたまる俳句です。同い年の友達と白髪をほめ合う事ができるなんて最高に幸せです。お互いの来し方を認め合い、そのことまでも、ほめ合っているように思います。

春一番回転木馬動き出す　橋本　幹夫

冬から春へと移行する頃になると、心わくわくと遊園地へ家族、友人で出掛けたくなります。回転木馬に乗る人、見る人も楽しくなります。春一番が回転木馬を廻している、そんなメルヘンが見えてきます。

諸　家　近　詠

花房八重子

書架の奥あの片便り花だより
浜昼顔話せば遠くなる人よ
うつそみの視野のかぎりをポピー揺れ
然りとても夢と思えぬ遠花火
遠雷や木橋石橋反りやすし

原　鈴子

半夏生の葉いちまい白い孤独
朝の空気ひとりじめして鳴く山鳩
紫蘇色に染まる梅あなたを染める
百日紅わけの分からぬ花びら散らす
立秋を待たず女郎花のせっかち

藤野家ひろ

フレイルの脚を労る冬の虹
揚げひばり昼の歩幅を緩めたり
芝焼の燻り香まとふ男衆
日本晴の一品となる花菜漬
終活の途中なんです揚雲雀

藤原由美子

初護摩や尼僧の紅のうつすらと
吊るし雛天井低き旧商家
初つばめ厨の窓を横切れり
瀬音にもたしかなリズム夏に入る
沢の音高高とあり梅雨晴間

古川　麦子

深爪のたび老いてゆく雪女
半身を今も夜汽車が西行忌
花冷の暗さ指の名たしかめる
卍六画春一番か二番
旧かな文字のやうなる七草粥

前田　宏

足跡の膨らんでをり春の雪
山裾の里やわらかくす花三分
春耕や勝手に走る耕耘機
胸元に透けし糸屑夏の雲
宵螢淡き闇より闇深き

万波　照世

天高しあやつり人形糸を切る
満月やうさぎのかける縄梯子
こんな日もありぬ枯蟷螂の黙
泣きたくてもひとり夜の雪だるま
野良猫と知らず生まるる子猫かな

見手倉美砂子

古希迎ふ旅は津軽や桜桃忌
この道を行かば浄土か西行忌
雲の峰届け若人ジャムセッション
青田風津軽平野を吹き抜けて
阿波の宵引き込まれたり踊りの輪

三村　榮一

西日射す待合室の大疲れ
点滴と病衣と夏の白い雲
フォークリフトの夜勤独りの熱帯夜
「野菊の墓」共に観し夜の片想い
梅雨寒や「笠碁」に濡れてざこば逝く

三宅　章文

優曇華やそこは先生ケースバイケース
優曇華や風にぷるぷる君ぷるん
豚骨を啜る卯の花腐しかな
万緑をスキャンスイッチバック登る
打水や左しつちやか右ちやつちや

宮下　哲朗

不合格ゆつくり踵返す春
グラタンのこんがり焼けて春の雨
春炬燵しまひかねたる寒さなほ
短冊の悦子選の句春惜しむ
社名のみ残るバス停竹の秋

目賀　紀子

栄転も別れのひとつ花の雨
蜘蛛の巣の手技に光る雨上がり
表札の変わりて知るや春異動
水遊び存分にした子の寝息かな
ふる里やあだ名とびかう踊りの夜

諸　家　近　詠

舟べりより見上げる烏城楠若葉
ポンデリング空にかざせば新茶の香
盲導犬ペットに戻り月見草
万緑や坐禅会場調うて
よいしょっと降りるステップ梅雨晴間

森田　景

あれこれと言訳重ね去年今年
男前にちょっと短く剪定す
空豆の両手両足天に向く
焼き過ぎの苦き目刺の独り言
旅先のなごむ方言合歓の花

保田　紺屋

万緑を水面に染める城の濠
ざる蕎麦を器用に啜る音涼し
暑いですね見知らぬ人に声を掛け
亡き母の声がしたよな夏の朝
丁寧に汗を拭いて大相撲

青木　良太

晩夏光未完のままの設計図
翡翠を待つ四阿の三時間
触れたがる手を抑へては盆踊
万緑のどこか崩るるクラクション
八月のマトリョーシカは首傾げ

秋岡　宣子

少年の朝楽しくす雪達磨
ものの芽や大地からくる微振動
海草を東風にさらして島の朝
肋骨にヨガの軋みや蝉時雨
冬星や耳に旋律それっきり

阿部　真子

隣人へ犬の鳴きつく梅雨の月
大雨の予報沖縄記念の日
軒下の玉葱すでに十は落つ
夕方の谷風に会ふ缶ビール
照り降りの傘二三本夏日遅々

天野　光暉

無人駅燕の大群押し寄せて
脇役が時には主役冷奴
星の里山また山に栗の花
幸せは冷えし梅酒風呂上がり
柿の実の小さきまにぽたぽたと

池上栄実子

無数の眼広島の夜の川
夾竹桃真っ赤広島の黒い雲
沙羅散るや水の余白に又ひとつ
蛍火や人は生涯灯を求め
生国は伊予の山峡蕎麦の花

伊藤　舜

赤壺詩社一〇〇周年記念号　青い地球　誌季刊発行

赤壺詩社は遡ること大正十一年に「蛸壺社」として倉敷市児島に結成された自由律俳句結社、その後「赤壺詩社」と改名される。創始者は下津井診療所の歯科医師松本西平、令和五年十二月一〇〇周年記念号（代表発行者　角南晃）発行、現在に至る。

また、「青い地球」誌も昭和三十六年に始まる長い歴史がある。赤壺同人「岡涓二」が発起人、京都の「海紅」同人たちと「青い地球」を立ち上げる。最初の編集者は日下部正治、（二〇一〇年（平成二十二年）死去後、諏訪の中村加津彦、倉敷の原鈴子と続きます。当時ソ連の宇宙飛行士、ガガーリンが「地球は青かった」から命名したものだが、自由律俳句の灯を消さず、また自由律俳句の革新をねがって出発したもの。現在の編集は児島の青い地球新社 原鈴子により季刊誌として発行。

自由律俳句はあまり認知されていないというのが実情ですが倉敷市児島の結社として活躍されている。

赤壺詩社一〇〇周年記念号

青い地球誌

令和５年度 会計報告書

自令和５年４月１日～至令和６年３月31日

収入の部

項　目	金額	摘　要
前期繰越金	269,733	
年　会　費	71,000	
助　成　金	147,000	
育　成　金	10,000	
総会収入	44,000	
雑　収　入	64,841	
合　計	606,574	

支出の部

項　目	金額	摘　要
会報発行費	123,200	会報54・55号
会　議　費	14,784	
総　会　費	38,780	
通　信　費	52,679	
事務印刷消耗品費	2,175	
慶　弔　費	21,000	永禮宣子顧問
負　担　金	29,200	
雑　費	4,836	
次期繰越金	319,920	
合　計	606,574	

上記のとおりご報告致します

令和６年４月５日

事務局会計 薄 和子

会計監査 加藤正夜 黒瀬琢葉

令和６年度 会計予算書

自令和６年４月１日～至令和７年３月31日

収入の部

項　目	金額	摘　要
前期繰越金	319,920	
年　会　費	70,000	
助　成　金	140,000	
合　計	529,920	

支出の部

項　目	金額	摘　要
会報発行費	130,000	会報56・57号
会　議　費	20,000	
通　信　費	60,000	
事　務　費	5,000	
負　担　金	28,000	
予　備　費	286,920	
合　計	529,920	

第二十九回 俳句大会のご案内

日　程　令和六年十月十三日㈰
時　間　午前十一時～午後三時三十分
会　場　岡山県ゆうあいセンター（きらめきプラザ）
会　費　二、〇〇〇円
作品募集　所定の用紙による
締切り　令和六年八月十六日㈮必着
送り先　〒七〇〇－〇八〇二
岡山市北区三野二－十一－四一
花房典子方
「俳句大会事務局」

第二十五回 吟行案内

岡山県現代俳句協会

日　時　令和六年十一月四日（月・振休）
吟行地　岡山後楽園
集　合　鶴鳴館前（入場口右手）
受　付　十時～
会　費　二、五〇〇円（弁当・会場費・賞品代）
申込先　花房典子
TEL　〇九〇－五六九三－六二二〇
FAX　〇八六－二二二－二二三五
申込締切り　十月二十九日㈫必着
グループでの申し込み可

ご逝去　心よりご冥福をお祈り申し上げます。
國定義明顧問　令和六年五月十日　享年九十歳

おかやま現俳句会

日程　9月8日・12月1日・3月2日
時間　13時～
会場　岡山県ゆうあいセンター（きらめきプラザ）

事務局・編集部だより

▽会報五十六号をお届けします。秋の吟行会の案内も同封いたしました。会報発行にあたり皆様にはご多用中にも拘わらず、快く原稿依頼にご協力頂き感謝申し上げます。（前田　宏）

▽令和六年度までの岡山県現代俳句協会年会費が未納の方に再度振込用紙を同封しております。ご協力の程よろしくお願いします。（薄　和子）

会報他受贈深謝

各県、各地区より会報、句集等、贈呈いただき有難くお礼申し上げます。

現代俳句岡山・第五十六号

令和六年九月一日発行

発行責任者　木村ゆきこ
発行所　岡山県現代俳句協会
編集人　前田　宏
事務局　〒七〇〇－〇九七五
岡山市北区今八－二－二八－三〇一　前田宏方
TEL・FAX（〇八六）二四六－〇七六二